

63rd morning:2016年9月18日(日)@渋谷
参加者:8名、芹澤(進行)

『死の棘』は、魂のうめきに寄り添い続ける従属的な夫という存在を描き、夫婦や家族の凄絶味を極限状態から照射した作品。

極限状態で結ばれた夫婦が、断絶の危機に合い、絆を取り戻そうとする様を情感豊かに描く。

【テーマ】 〈エロスとタナトス(3)完〉

『猟銃』や『暗室』同様、本作にも不貞という恋愛模様が描かれています。「不倫も官能も悪だ」という世間一般の常識や社会通念がある一方で、文学作品は、不倫や姦通、不義や怨恨、情死や心中など、いってみれば「悪」のオンパレードなのです。哲学や倫理学が厳密に「正義とはなにか?」「なぜそれを行ってはいけないのか?その根拠はどこにあるのか?」を問うとすれば、文学は「それでもそうしてしまう人間の持つ”業”や”孤独”や”弱さ”を容赦なく描き出す」点が特徴的です。人間の中にある愚かしさと崇高さを同時に描き、問い返ししながら、「人間ってなんだろう?」ということを生身の断面から考察していきます。だからこそ文学は、理性だけでも感情だけでもない人間そのものを包括的に描きだす点で、人間という存在を立体的に考えるのに適しています。

今シーズン(7月~9月)の朝さろんで取り上げる作品にはそれぞれ「悪」が仕掛けられていますが、単にそれがいいとか悪いとかいう断罪をするのではなく、個々の作品が描き出す「生と性のあり様」を丸ごと熟読玩味しながら、個々の人物像の奥にひそむ〈エロス〉と〈タナトス〉という問題系の方にフォーカスをあてます(シーズンラインナップがすべて男性作家の男性視点になるものばかりなので、女性作家の視点もいずれ補完したいと思っています)。とはいえ、あまり堅苦しくならず、小説を読む愉楽に浸りながら、なによりもまず楽しい読書会にしたいと考えています。

【本】

『死の棘』 島尾敏雄(新潮社、1977) 文庫本:新潮文庫(1981)

初出:1960年から1976年まで、『群像』、『文学界』、『新潮』などに短編の形で断続的に連載

【島尾敏雄(しまお としお)】

(1917年(大正6年)4月18日-1986年(昭和61年)11月12日)。作家。第十八震洋特攻隊(魚雷艇)隊長として、奄美群島加計呂麻島に赴任。1945年8月13日に特攻戦が発動され、出撃命令を受けたが発進の号令を受けぬまま即時待機のうちに終戦を迎える。1946年3月、島で知り合った素封家の娘大平ミホと結婚。

作品は超現実主義的な「夢の中での日常」などの系列、戦争中の体験を描いた「出発は遂に訪れず」などの系列、さらに家庭生活を描いた「死の棘」などの系列に大別される。また生涯書き続けられ、小説作品との決定的な差異は無いとされる日記や紀行文など記録性の高いテキスト群や南島論なども高い比重を占める。妻は作家の島尾ミホ。長男は写真家の島尾伸三、長女のマヤ。漫画家のし

まおまほは孫。心因性の精神症状に悩む妻との生活を描いた『死の棘』は小栗康平によって映画化。

1956年カトリックの洗礼を受ける。この頃から南島研究を始め、1950年からは再び自分と家族の救済と癒しを祈念して奄美大島に戻る。その生活から東京と日本文化をとらえ直す「ヤポネシア」なる概念や視座を獲得した。

【ストーリー】

高校の非常勤講師を勤めながら、小説を書いている「私」の裏切りを感じた妻は突然変調する。家庭には二人の子供がいた。妻の自殺を恐れた私は外出も出来ず、内では妻は私を糾弾し続ける。崩壊を始めた生の形を見つめ、その根源に刺さっている棘に触れながら、「私」は妻とともに精神病院の病室に閉じ籠る。

【お題】作品を読んで次の問いについて考えてみましょう

- 1)、本書を読んだ感想を教えてください。難しく考えずに、印象に残るもので結構です。
- 2)、この本を読んで気になった点、ほかの人に訊いてみたいこと、一緒に解釈してみたい箇所など、自由に挙げてください。
- 3)、本書「死の棘」が名作だとして、この本の名作たるポイントはどの辺りにあると思いますか？
(それは本書でなければあり得ないような点なのでしょうか？)

【解題】『死の棘』という作品について

●新潮社版『死の棘』(1977)への経緯

長編での第一章「離脱」、第二章「死の棘」までを収録した1961年(昭和36年)刊の講談社版、同じく第三章「崖のふち」、第四章「日は日に」までを収録した1963年(昭和38年)刊の角川文庫版も存在する。

表題は新約聖書『コリントの信徒への手紙一』第十五章第五十五、五十六節「死の棘は罪なり。罪の力は律法なり。」から。

●「死の棘」日記

文芸誌『新潮』に1999年(平成11年)新年号から12月号にかけて1955年(昭和30年)1月1日 - 12月31日分が連載。2002年(平成14年)4月号に1954年(昭和29年)9月30日 - 12月31日分が掲載され、2005年(平成17年)に新潮社より刊行。小説『死の棘』全編および病妻記諸編に対応する時期の克明な記録が綴られる。

●島尾ミホ

1919年10月24日 - 2007年3月25日。日本の作家。奄美群島加計呂麻島出身。夫・島尾敏雄の代表作『死の棘』に登場する「妻」のモデル。『海辺の生と死』で田村俊子賞を受賞。他に『祭り裏』、短編「その夜」など故郷に題材を取った作品が多い。奄美の加計呂麻(かけろま)島の島長(しまおさ)で祭事を司る「ノロ」の家系に生まれ、巫女後継者と目された。

聡明篤実な海軍士官であった島尾中尉は、島の人らから「隊長さま」と慕われた。島尾とは戦後の1946年に結婚。ミホは後々まで、白い海軍の正装姿の若き日の敏雄・「隊長さま」の写真を、大切に自室に掲げた。「トシオはただの人。でも、『隊長さま』は、神さまでした」とミホは述懐している。島尾敏雄の間に息子の島尾伸三(写真家)と娘の島尾マヤ(1950年-2002年)がいる。1986年11月に島尾敏雄が死去。その後は喪服を常に着続けた。

2007年3月25日、脳内出血のため奄美市の自宅で死去。3月27日午前10時、独居のため、孫のしまおまほ(文筆家・漫画家)によって発見された。享年89(満87歳没)。

▼今秋評伝が出版

梯久美子(著)『狂うひと; 「死の棘」の妻・島尾ミホ』(新潮社、2016/10/31)

●島尾敏雄と「死の棘」

島尾敏雄は、現実の自己解体に耐えぬいた眼で、存在の底にある本質を超現実的な方法によって描く、もっとも前衛的な作家である。一見私小説に見える作品も、幻視される空間と凝縮された時間との重層構成する独創的な方法で、現代文学の可能性を追求している。

作品「死の棘」は、病妻物の私小説の形をもっているが、吉本隆明は作家の体験に作品成立の契機を依存しながら、「家族の本質が極限において」描かれていること、「彼にとって本質的な体験である戦争体験と、まったく同型の心的な体験がここに繰り返されていること」の二点を挙げて、日本的な私小説とモチーフを異にすることを示唆している。結末で「私」は妻の変貌を畏れ、起こるはずの「世界の変貌」(吉本隆明)の只中に素手で座りこむ。現代の地獄と救済の光の真相からの文体で描いて、日本の“神曲”ともいべき作品となっている。(『新研究資料 現代日本文学』第2巻)

●極限を問われる裸形の家 ——『死の棘』

島尾敏雄には本質的に漂泊者、旅行者の要素がある。故郷は東北の相馬でありながら、横浜に生まれ、神戸、長崎、博多と港町を転々とし、フィリピン、満州を旅行し、海軍では旅順、横須賀、川棚、そして奄美群島と、戦後も神戸、小岩、佐倉、市川、池袋、名瀬、指宿、茅ヶ崎、鹿児島に加治木、吉野、宇宿と転々とし、ロシア、東欧、イタリア、プエルトリコなどを旅行する。ひとりであてどなくさまよい歩く時、はじめて彼は心の故郷をおぼえ安息するのではないか。シルクロード、港町の白系露人の少女を憧れさまよい歩く。「宿定め」「月下の渦潮」「勾配のあるラビリンス」「旅は妻子を連れて」「ちっぽ

けなアヴァンチュール」「断崖館」「帰巢者の憂鬱」など放浪小説は限らないが、その原形が「単独旅行者」であろう。学生時代を過ごした長崎らしき港町に飄然と戻って来て、足のおもむくまま歩きまわり昔なつかしい白系ロシア人の家を訪ねる。バスで川浦まで行きホテルで行きずりの女と遭い、一夜を共にし、一緒に天草に渡る。何か落ち着かないうらがなしい、しかし責任や日常生活から解放された旅の気軽な気分をたのしんでいる。「島の果て」から「死の棘」など恋愛や夫婦の関係を絶対とする半面、このような孤独なエキザイルとしての漂白の魂が強く潜んでいるのだ。この心が「夢のかげを求めて」の長編の東欧紀行やハワイ、プエルトリコの旅行記の秀作を書かしたためであろう。

しかし現実には島尾敏雄は自由な“単独旅行者”になかなか成り得なかった。特攻隊長の時、死を前にした古代さながらの絶対の恋愛を成就してしまったのだから、ミホさんとは死より強く宿命的に結ばれてしまったのだから。昭和二十一年三月、米軍占領下の奄美から脱出して来た大平ミホと神戸で結婚する。伸三、マヤの二人の子供も生まれたが、昭和二十七年三月、東京の小岩に居を移し本格的な作家活動を志す。しかしこの時の島尾はかつてのりりしい神のごとき隊長でなく、心弱い文学青年であり、ミホはノロの血を引く霊能者ではなく、都会の片隅に住む田舎出の女性に過ぎなくなり、二人の関係は次第に不安になる。しかも島尾は無頼の文学を目指し、家を破ろうとし、外に心を開く。そのことを知った妻の悲しみは爆発し、神経が狂う。そして昼も夜も無限に夫を追求し、愛を誓わせ、死に走ろうとする。愕然とした夫は、すべてを投げうち、妻と一体になり魂を鎮め、罪を償おうとする。しかし二人の心はなかなか元通りにならず、こじれにこじれる。「死の棘」を読んでいると肌に粟が生じるような怖しさで二人の子供も脅え、明るいマヤは口が利けなくなる、この世の地獄を見る想いの生活である。ここでは死と神の試しを前にして夫婦とは何か、愛とは何かが極限まで問われ、男と女の本質が開示される。この入院させるまでの九か月を十六年余の歳月をかけて十二章の長編『死の棘』として完成させた。「死の棘」には原緒的な夫婦の姿が浮かびあがり、凄絶の果てに美しさ、笑いまでが表現されている。書くに当って、夫は妻の心を作者の心にしてしまい、妻の信仰しているカトリックの受洗をする。これは私小説のかたちを借りて私小説をはるかに超越した、類のない小説である。こうまで夫婦、男女の裸の姿、関係の本質を描き得た小説は世界にないであろう。

(奥野健男 「島尾敏雄・人と作品」、『昭和文学全集 第20巻』)

●魂が「うめき」つづける女 ——島尾敏雄「死の棘」

女の時代とは、日本から戦争がなくなった時代のことであった。この女の時代の始原を激しく生きた女性がいた。ミホである。島尾敏雄と大平ミホとは、運命的な出会いをした。震洋魚雷艇の特攻隊長として奄美群島加計呂麻島呑ノ浦に基地を設置した島尾敏雄は、島民から神様として尊敬されるようになる。1945年2月には大平ミホと知り合い愛しあう。ミホは「嫉妬や憎悪の訓練が欠落した」(「死の棘」)天性の自然児であった。

特攻隊へ発動の指令がくんだり、死を覚悟した島尾敏雄は出発命令をじっと待った。同じとき、ミホは島尾隊の発進を見送ったあと短剣で喉を突いて自殺するべく岬の岩の上に立ちつくしていた。しかし、島尾隊への特攻出発命令は遂に発令されなかった。そうした「異常な完結的予定の行動が延期さ

れると、日常のすべてのいとなみが氣息を吹き返す（「出発は遂に訪れず」）してくる。

それから十年たち、結婚した二人のあいだにはマヤが生まれていた。「夫＝トシオ」に愛人ができた。夫の不実を「妻＝ミホ」は断罪しはじめる。はじめて知った嫉妬と憎悪に、ミホは物怪がついたように狂う。妻は夫にむかって、「あなたはわたしのもの」とはっきり断言する。戦争下という異常のなかで芽ばえた一人の男と一人の女の絆は、日常のなかで発生した異常を擦過させず、あるがままの現実をムズとつかんでしまう。妻は夫を自分とは別の人格をもつ「他者」とは認めない。あくまで「あなた」は「あたしのもの」なのである。「あたし」と「あなた」とのあいだに蟻一匹入りこむすきがあってもいけない。そこにわずかのすきでもできると妻の気が触れる。

トシオとミホの前に広がっていたのは、女の時代が切りひらこうとしている新しい土地である。幼児期から嫉妬や憎悪の訓練を一切してこなかったミホの嫉妬や憎悪は、社会的規範や禁忌とは無縁に純粹培養されたものであった。嫉妬や憎悪はトシオにむけて集中する。

妻は夫にたいして絶対的な弾劾者になる。妻は夫にむかって過去の一切を「告白」することを強要する。夫は妻の前で一切を「告白」する。しかし人が人にむかって自分の過去のすべてを「告白」することができるであろうか。「ホンシンヲ、言エ」と迫る妻は、感情の疎通を拒否した「一個無慈悲なメカニカルな装置」（「治療」）と化す。いったいなにが「ホンシン」なのか。妻を納得させる「ホンシン」などこの世にあるのか。夫に嘔みついたのがこの不気味な人生の罫である。家のなかには修羅で地獄である。妻は弾劾をしつづけ、夫は身をそらさず弾劾を受けとめつづける。家庭は崩壊してしまう。そこでついに夫は妻と一緒に精神病院の一室に寄居することになる。そして物狂う妻とつきあっているうちに、どうしようもなくなった夫もまた物狂ってしまう。

*

それまで男の時代をつちかしてきた男の論理をもって、妻の狂気と対等につきあうことは夫にはできない。妻の狂気は女の時代の出発を告げる場所でおこった原始的なエネルギーの爆発である。それは抑圧してはならないものだった。壊してはならないものを壊したところに発生した狂気だから、その狂気は宗教の根源に触れていた。妻の狂気は魂の「うめき」だった。この「うめき」の発動は止めることができない。「うめき」はじめた魂は端から端まで味わいつくされねばならない。夫は妻がすべて味わいつくすまで妻の魂の「うめき」を共有した。このトシオとの共生をとおして、「人を許すか憎むかのジレンマに立たされた」（「死の棘」）ミホという女性が蘇生する。その間に島尾敏雄はカトリックの洗礼を受けている。娘のマヤは原因の解明できない言語障害の病気にかかり、話せなくなった。

女の時代の開始にあたって、女たちが苦しむ。苦しむ女たちの「うめき」から男は逃げない。逃げられるものではないからだ。そこで男は停滞する。停滞するというのは、時間がまっすぐに流れなくなることである。時間は重なる。照応しあう。融合する。重なり、照応しあい、融合しながら、すべての時を呑みこんで大河のように悠然と流れる。そこでは夢と現実の区別はなくなって、夢でありながら現実でもある靈妙な世界が出現する。

（川西正明 『「死霊」から「キッチン」へ』）

【まとめ】

シーズン三作品に描かれるそれぞれの〈エロス〉と〈タナトス〉の風景をみながら、あらためて恋愛や夫婦というものを見つめ直すことができたのではないかと思います。

あえて今風にいえば、『猟銃』では不倫はするけれども本心をさせない「陰キャ」で「コミュ症」な主人公の姿が問い直され、『暗室』では「セックス依存症」とも思えるような男性主人公が抱える虚無さと妙な熱情が不気味に考察され、『死の棘』では「メンヘラ」な妻と一緒に落ちていく「共依存」の状態が凄絶に、しかしある意味で神話的に描かれている、ともいえるかもしれません。しかし、これら三作品がそのように特徴づけられそうな要素を孕みながらも、文学作品としてそういう表面的な理解を簡単に超えていく奥深さと説得力、繊細さと大胆さを湛えていることにほどなく気づくことになります。

このように、時代を潜り抜けて生き延びた作品から、現代社会の風俗や不倫というニュースを逆照射してみる時、なんと表層の部分での断罪や非難ばかりが行われているかということにすぐ気が付くでしょう。それは愛や生が、そして性が、倫理や理性で簡単に説き伏せられるようなものではない、来もっと奥深く、豊穡なものなのだとすることを、再確認することにもなるのではないのでしょうか。

よくもわるくも、それが文学が描いてきた愛や官能の姿であるのです。

さて、朝さろん 10-12 月期は小休止となり、その間はカジュアルな「夜さろん」に注力する予定です。この間に、朝さろんのプチ・ヴァージョンアップを構想／準備していきたいと思っています。

「(哲学的)対話」と、「(想像的な)解釈」と、「(文学的な)レクチャー」という三位一体の、哲学プラクティスの一形態としての読書会を、さらに磨き上げて実践していきたいと考えています。一冊の作品だけで「ここまでできるんだ!？」というあたらしい沃野へ、一緒にピクニックに出かけましょう!

ぜひお楽しみに。

※参考文献

- ・『新研究資料 現代日本文学 第2巻』(明治書院、2000)
- ・『昭和文学全集 第20巻』(小学館、1987)
- ・『「死霊」から「キッチン」へ』川西正明(講談社新書、1995)
- ・『「死の棘」日記』島尾敏雄(新潮文庫、2008)
- ・『島尾敏雄日記—『死の棘』までの日々』島尾敏雄(新潮社、2010)
- ・『海辺の生と死』島尾ミホ(中公文庫、2013)

